

四天の邪鬼と方相鬼——鬼の思想研究・その三——

岩 佐 貫 三

まえがき

既に二・三の学会に於て発表した鬼の思想研究に關連する一連の小論であり、鬼の思想を東洋諸思想とのシンクレチズムの側面から考えてみたい。

(一) 鬼に關する中国的発想と日本の受容 (昭和四〇・十一・日本道教学会)

(二) 鬼門思想の展開 (昭和四七・九・東洋大学東洋学研究所)

(三) 四天の邪鬼と方相鬼 (昭和五一・六・日本印仏学会)

奈良朝の宮中にて行われた追儺祭に用いられた黄金四目の方相氏 (周礼・夏官下・司馬官参参照) の仮面がいつのまにか鎌倉後期の諸寺院に於ける追儺会では四天王の一つ毘沙門天 (Vaisra Vana) の面に変つてゐる。これは非常に複雑な變容の一つである。これを一の手さぐりの一ヒントとして四天王の邪鬼と方相鬼の關連を考へてゆきたい。法隆寺金堂四天王足下の邪鬼・東大寺三月堂或いは戒壇院の四天王の足下の邪鬼・薬師寺本尊須弥壇に画かれた邪鬼等にはユーモア性に富

四天の邪鬼と方相鬼 (岩 佐)

むインド的なものと非インド的なカラーのコントラスト、中国的性格と日本の性格との混合等がみられる。邪鬼・踏鬼・天邪鬼・夜叉・羅刹等は埃にまみれた片隅の日蔭者として一方、ハイクラスの天部の諸天とは対照的に一般人は美と醜とのコントラストとしてみるが、私にはこの邪鬼の中に含まれる本質的なものが従来、忘れられているように考えられる。印度古代の *Isana* 王朝 (A. C. 100—150) 時代の *Gandhara* 系の *Yaksa* (神なり、*Yakṣini*) などの眷屬たる童子の *Nilāmba* (*Nīlā*) と毘藍婆 (*Gīlva*) (大正蔵・2・金剛智訳・吽迦陀野儀軌卷上参照) なり、遡ては *Sarasva* 王朝 (B. C. 200—100) の *Barhuc* の三十体の像の中にみえる薬叉王の邪鬼 (印度・ラクノー考古博物館蔵) なり、更に後世になつての持国・增長・広目・多聞の四天王の邪鬼の系列なりと、一方中国後漢末より六朝時代にかけての周礼夏官司馬の官制にみえる中国的伝承たる方相氏の儺祭の対象たる鬼類の間ほどの程度の相關々係を考へることができらるであろうか。仮りにこの兩者

にはある時代に何等かの相関々係があつたとしても、その關係についてはにわかには断じがたい。別系統のものが偶々類似性をもつに至つたのであろうか。或は自然的に相互から習合的に影響を与えたものであろうか。これらの問題は容易には結論しがたい。しかしいずれにしても、いくつかの問題はとり上げられねばならない。今、六朝時代を中心において考えたい。例えば四天の一つ広目天 (Vishvadeva) の持物は四天王の儀軌によると筆管と巻物との二物がみられるが、これはかの中国の十王の眷屬たる俱生神 (Vividhava) 的な、乃至は道教にみる泰山府君的儀軌のそれではないだろうか。又、毘沙門天と多聞天とのむすびつきは波羅門天、つまり北方神 (Kuvera) 的性格から招来したものととしても、これらが中国に渡来後には如何なる変相の過程を辿つたのであろうか。或はまた今日、西域出土品等に見られる兜跋毗沙門天 (これを *Uttara* と系する学者もいる) は四天の邪鬼とこれにまつわる地天 (*Prithivi*) (女性神) との關係を通して中国に如何に受け入れられたのであろうか。この他、地天の単・複数問題なり、阿・吒形なりは如何なる影響によるものであろうか。これは帰するところ俱生神の影響と思われるが、又、貴人の姿から武人の姿へと転移するその形相などと思ひ合せて方相氏の毆疫の故事における服装の変遷なりとの関連を如何に考えるべきであらうか等々の問題も併せて掘り下げる必要もあろう。足利初期の

写本と伝えられるかの北辰別行法 (国会図書館蔵) の中に妙見曼陀羅があるが、その中に衆生ありて寿算を増さんと欲せば四臂の菩薩像を画作すべし……右の第一手には筆を持ち、左の第一手には紀籍を持つ云々とみえている一句がある。この儀軌と広目天との儀軌とを思い合わせ、更には十王の眷屬たる四裁官 (崔・王・趙・宋) の姿や、薬師琉璃光如来本願功德経等に見える俱生神の姿を考えてみた場合、道密の両思想の残滓とそれに近いものとのシンクレチズム思想をこれに見出せるような感がする。

或は一般的に考えて持国天の劔、增長天の劔、広目天の筆と巻物、多聞天の宝塔の儀軌等は定形があつて定形がないようにも思えるし、中国訳経時代の変遷過渡期にあつてそれは如何なる前後關係がみられたのであろうか。

この事なども明らかにされなければならぬ。それにしても十王思想中の司命王類の儀軌とあまりにも類似性がみとめられる。

又、遡て古代インドの Gandhara 時代には多くの四天王と共に多聞天と共に同一視された俱吠羅神が多く作られていることは周知の通りである。或はこの俱吠羅神と共に注目すべきものには金剛葉叉 (金剛力士) がある。別に金剛杵 (独鈷・三鈷の類) をもつ葉叉像は特に注目されてよい。例えば前述の Bharhut の葉叉・葉叉尼像の代表的なものは欄楯の柱彫

に残されているが、そのうちでも象の背中に立つて合掌している形骸があり（印度・ラクノー考古学博物館蔵）、その足下には、はつきり摩伽羅天（Makara）を蹈む菓叉がいる。松本栄一博士の名著・燉煌画の研究・図像篇（p. 417）には毘沙門天の別格として西域の Turtan 由来ともいわれる兜跋毘沙門天の変遷についての詳細な叙述がみられるが、特にその伝来のルートについては示唆をうけるものが多い。又、同書所載（p. 419）のフランス・ルーブル博物館蔵の紙本著色毘沙門天像（唐代の作と推定）によれば、これは写経用紙に描かれている図像・図巻の一部断片であるが、赤衣の釈迦立像に次いで描かれているが、この毘沙門天は地神（天）の両掌、及びその左右に蹲踞する尼藍婆・毘藍婆の掌に支えられている。右手には旗をもつ戟をかかけ、左手には宝塔を持つて正面向きに直立する。かくの如く毘沙門天とこの二鬼との関係を遺品によつて考証した場合、この兜跋毘沙門天像から特に地天の脇侍たる尼藍婆、毘藍婆の両神に私は *tribhava* 的性格をみ出すのである。

これらの儀軌の誌すとこに從えば（参照・大正蔵 21・219・摩訶吠室囉末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀軌・画像品・大正蔵 18・879・陀羅尼集経・11・四天像法、大正蔵 21・125・北方毘沙門天王隨軍護法儀軌、大正蔵 21・235・吽迦陀野儀軌）毘・尼の二鬼が男性鬼と女性鬼であることにも注目されるし、又、中央の地神（地天・

四天の邪鬼と方相鬼（岩 佐）

女神）に侍する脇侍として説明される場合が多い。このことは前例の *Bhairav* の菓叉女像と摩伽羅天との因縁關係があるようにも思われる。一般に云て古代インド流通の仏神の儀軌が徐々ではあるが下降して中国本来の性格と習合してゆく過程に二重性格的なものを、例えば西域的（Turtan 地方）カラーを包含しつつ中国的な仏神像に切り変つてゆく。その際にその足下にふまえられた邪鬼も中国各時代の種々の変化をうけ入れながらこれらを取り入れつつ推移した事であろう。特に中国在来の鬼神觀なり、鬼思想なりと如何に絡み合つて行つたであろうか。漢末から六朝にかけての儺祭なり、方相鬼なりとの関連に於て考えてみる必要が生じる。

梁の宗懐の荆楚歲時記に次のような文がみられる。十二月八日。為臘日。諺言。臘鼓鳴。春草生。村人鑿細腰鼓。戴胡頭。及金剛力士。以逐疫……この文そのものには多少の錯簡・誤字が考えられるが、六朝時代に一部南方地方で盛行されたかの儺祭の方相氏行事に於ける逐鬼行事と、この四天の邪鬼とを結びつけるには、或は異質のものを索強に附会せんとする恐れもなしとしないが、元々、異質の殊なつた系統の発想思想のある時代に於けるその出入と交渉との問題については、この中国的性格を相当つよく比重を置いて論ずる学者もいる。又、全然無關係であろうと思われるいくつかの事例をとりあげて論らう論者もいるが、ベルギーの Henze

(Chinese Tomb Figures—1928年刊)とか、アメリカの Lanfer (Chinese Clay Figures—1914年刊)等の東洋学者の説などもふまえて考えてみたい。事実、六朝時代に盛んに行われた仏教、特に密教系のそれと関連して方相氏の信仰が著しい展開をとげたことに注目せねばならぬが、四人の方相氏が墓壙に入つてその四隅を撃ち、四方の鬼を払うということは仏教の四天王とも関連しそれと交錯して中国製作の四天王は印度のそれに似るよりもむしろ方相氏に類している。

このことはまた風水思想なり、四神思想なりとも一脈の關係があろう。盾こそ持たぬが、甲を着け、戈を執つて四方を打つことは方相氏の姿に外ならぬと考えられるが、この接点の問題は慎重に考えねばならぬ問題でもある。しかし四天の足下にふまれた二鬼と地天とを方相鬼の關係と比較してこれを直ちに單純に放逐鬼事の姿なりと推論するのは少々独断であり、本質的には両者はかなり異つたものであるからである。四天鬼より方相鬼への推移を六朝から唐代にかけておびただしい土偶発掘品にみ出し得るからと云つて簡單には、わり切れぬものがある。それらの間には、交渉なり、交流なりの痕跡が皆無とはしないが、むしろ葉叉天の地天の協侍たる二鬼の変化したものが四天の邪鬼として発達したものととして考える方が自然的でなからうか。これに比して方相氏の邪鬼は悪疫追放の具象化であり、それ以外の何物でもない。只注

意されるのは、これら土偶発掘品の服裝の問題である。即ち貴人装から武人装へと転移する六朝時代の四天の服裝変移と方相氏の服裝の変移とが期を同じくしているということである。又、金剛力士と兜跋毘沙門天の武人装との交渉をどの程度迄みとめたらよろしいか。この問題を四天の中の多聞天（毘沙門天）の場合に狭めて考えた時、西域文化（主として *Juttar* 地方）の渡来時の変化と転移の時期がわかるようにも考えられる。勿論、葉叉神なり、葉叉尼神なりは仏法守護の善神であり、守門神であり、護塔神である。従て中国の疫神の方相鬼の意味する性格は発見されぬが、この異国的仏神を中国に於て受容の際、中国化し、中国的性格を与えることも至極当然なことといわねばならないし、別尊雜記所載の初唐の毗沙門天像なり敦煌遺品中の兜跋毘沙門天なりのいくつかにもこの事は適用できよう。それにしてもパリーのセルヌーシ美術館 (*Musee Carnuschi*) に保蔵される漢代方相氏土偶には考えさせられるものがあるし、又、旧山東省嘉祥県東南の武士祠石室の第三石・第三層石刻画の儼図の方相氏の形態については、中国的鬼と非中国的鬼との謎を解明するヒントが存するようにも思える。

（主要引用参考文献省略）